社会科

エージェンシーを発揮し、思考力・判断力を高める社会科授業の創造

長岡市立阪之上小学校　櫻井　諒（平成２３年度）

【主張】
これからの時代を生きる子どもたちに必要な力は「エージェンシー」である。「エージェンシー」は、思考力・判断力の資質・能力と関係性が深い。そのため、「エージェンシー」を発揮させる手立てを講じれば、子どもたちの思考力・判断力を高めることができるだろ

Ⅰ　主題設定の理由

OECD（2019）では、これからの時代を生きる子どもたちに必要な力を「エージェンシー」と表し、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」と定義している。自分で考えて目標を設定し、そのために必要な変化を考え（思考）、行動に移すことや、自ら意思決定や選択を行うこと（判断）がより重要なのである。つまり、「エージェンシー」を発揮しながら、思考力・判断力の資質・能力を高めていくことがこれからの時代、必要とされているのである。

そこで、本研究では、学びに向かう力として必要とされる「エージェンシー」を「立志・自立」、「共感・共創」、「追求・遂行」と設定する。それらを基に、社会科の学習において「エージェンシー」を発揮している姿を「社会的事象について抱いた問いから学習問題を設定し、その解決に向かって仲間と協働的に粘り強く追求していくことで、考えをつくっていく姿」と定義し、以下の三つの働き掛けを学習過程に意図的に設定する。

（１）信念をもってその職業に取り組んでいる人物から話を聞く場を設定する。
（２）子どもの認識とずれのある資料を提示する。
（３）学習問題について段階的な話合い活動を設定する。

このような働き掛けを設定して学習を組織することで、子どもが、「エージェンシー」を発揮しながら思考力・判断力を高める姿が期待できる。以上の理由から本研究主題を設定した。

Ⅱ　研究仮説

信念をもってその職業に取り組んでいる人物から話を聞いた上で形成された認識とずれる事象を提示し、設定した学習問題について段階的な話合い活動を行うことで、子どもは「エージェンシー」を発揮しながら思考力・判断力を高めることができるだろう。

Ⅲ　研究の内容と方法

第５学年社会科の授業において、以下の３つの働き掛けを講じる。Ａ児（問いや願いをもち、考えをもつことはできるが、自分の考えに自信をもてない子ども）の授業にかける具体的な様相と学級全体の変化から、研究仮説が有効であったか検証する。

１　信念をもってその職業に取り組んでいる人物から話を聞く場の設定

子どもが「エージェンシー」を発揮するためには、問いや「知りたい」と意欲をもったりすることが必要不可欠である。つまり、子どもの「心が動く」（藤井 2018）ことが求められている。心を動かす人物は、信念をもって子どもに取組を伝えてくれる人物である。子どもが単元の学習問題に対して自力調査では不十分さを感じたところで、学習問題に関わる職業に信念をもって取り組む人物から話を聞く場を設定する。このことにより、社会的事象に対して心を動かし、より興味をもって考え始める姿が期待できる。

２　子どもの認識とずれのある資料の提示

子どもは認識と事実にずれを感じたり、事実を受け入れなかったりしたときに問いをもつ。直接話を聞き、子どもの思考が安定したところで、子どもの認識とずれのある資料を提示する。このことにより、子どもの中に問いが生まれ、自ら追求を始める姿が期待できる。

３　学習問題について段階的な話合い活動の設定

学習問題について、まずグループで考えを出し合い、自分の考えをつくる活動を組織する。その後、より多くの仲間と考えを交流できるように全体で話し合う場を設定する。このことにより、自分の考えと仲間の考えを比較し、社会的事象の意味を多角的に考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりする力を養うことが期待できる。

Ⅳ　研究の実際（阪之上小学校　５年１組　26 名）

１　実践①（米づくりに携わる人々と私たちの暮らし）　令和７年６月実施　全１１時間

(1) 農家のＯさんの話に「心を動かした」Ａ児

単元の導入でインターネットの情報から新潟県の米が全国的に人気であることを知った子どもたちは、その理由を知りたいという願いをもった。そこで、「なぜ新潟県の米は他の県と比べて量が多くて、有名なのだろう。」と単元の学習問題を設定した。その理由を明らかにするために教科書やインターネットで調べ、生産過程の概要を明らかにした。しかし、それでは新潟県の米が有名である理由が十分ではなく、もっと詳しく知るために専門家から話を聞きたいと思いを高めたため、農家のＯさんから話を聞く場を設定した。子どもたちは、Ｏさんから米づくりの工夫だけでなく、「選ぶ、決める、踏み出す」、「汗一粒、米一粒」、「安定と挑戦」など、Ｏさんが米をつくる上で大切にしていることを聞いた。すると、Ａ児は図１のように自分に引き付けて感想を書いた。他の子どもにもＯさんの思いを自分なりに解釈している記述が見られ、「心を動かした」姿であると捉えた。

> １日に４８ha、グラウンド４０個分ということです。１日にグラウンド４０個分なんてすごいですね！私だったら途中でやめちゃいます。Ｏさんは、多くの人に米をあげようと思っていることが分かりました。

図１　Ａ児の感想

Ｏさんの話を聞くことで、米づくりを自分に引き付けて考え、より興味をもって考え始めた姿である。

(2) １等米の割合の変化に問いをもち、その理由について考え始めたＡ児

Ｏさんから近年の暑さによって米づくりが大変だったことを聞いた子どもたちに右の図２を提示した。猛暑だった令和５年の比率に納得したが、令和６年の比率を見せると「なんで。」、「すごい。」と反応した。子どもの認識と事象にずれがあった姿である。子どもたちは、農家さんたちが何か工夫をしたはずだと予想した。子どもが「暑さが厳しかったから、水に氷を入れたのではないか。」と話すとＡ児は、「暑かったら米がだめになってしまうから冷やす工夫をしたと思う。」と発言した。１等米の比率が上がったことに興味をもち、農家が取り組んだ工夫を考え始めた姿だと捉え、学習問題「なぜ 66.3％も１等米の比率が上がったのかな。」を設定した。Ａ児や他の子どもは「猛暑日が少なかったのではないか。」や「肥料を増やしたのではないか。」などと予想し始めた。

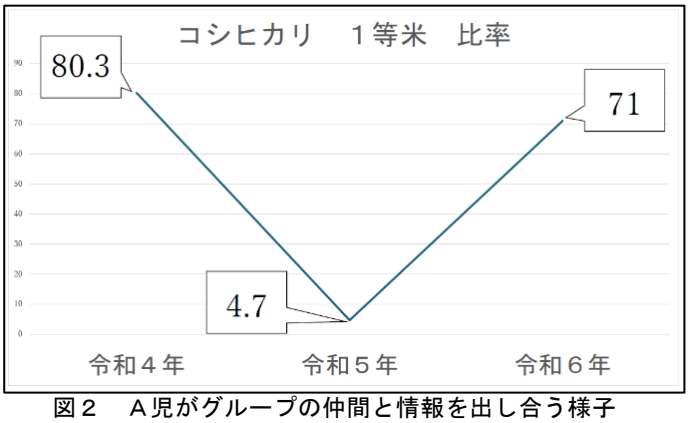

図２　Ａ児がグループの仲間と情報を出し合う様子

Ａ児を始めとした子どもたちの中に問いが生まれ、追求を始めた姿である。

(3) 仲間と協働しながら学習問題を多角的に考え、解決したＡ児

学習問題についての予想が出されたところで、資料（図３）を提示すると、Ａ児は資料を基にグループの仲間と話し合い始めた（図４）。仲間との話し合いによってＯさんの取組が他の人の取組と結び付いていることに気付いたＡ児の姿である（下線部）。そこで、全体で意見を交流する場を設定した。ある子が「みんなが協力したからだと思う。県のＳさんが水のやり方を地域で協力するように呼び掛けたり、ポンプの補助金を出したりしている。それに、品種改良もしている。ＪＡのＭさんは農家のＯさんにアドバイスをしている。」と発言すると、Ａ児は大きくうなずいた。グループでの気付きを確かにする姿である。そして、ノートに「降水量はちょっとしか増えなかったが、みんなが協力して対策を立てたから。」とまとめを書いた。

Ｓさん（新潟県）＜令和６年以降にやっていること＞
・暑さがきびしくなると、川から水をくみあげるためのポンプを買うお金の補助を出す。
・水のやり方を地域で協力するように呼びかける。
・暑さに強い米をつくろうと、コシヒカリの品種改良にとりかかる。

図３　それぞれの立場で取り組んでいること（一部）

Ａ１　市のＫさんと県のＳさん、川から水をくみ上げるポンプの補助金出しているよ。
Ｃ１　農家のＯさんとＪＡのＭさんは、令和５年の不作を受けてこのままではいけないと考えたって書いてある。
Ａ２　Ｏさんにも書いてあるかな。
Ｃ２　言葉は違うけれど、意味は同じだと思う。
Ｃ３　肥料をまく回数を増やしたとも書いてある。

図４　Ａ児がグループの仲間と情報を出し合う様子

Ａ児は、仲間と協働しながら粘り強く追求したことで、学習問題を多角的に考え、解決することができた。

２　実践②（情報を伝える人々と私たちの暮らし）　令和７年 10 月実施　全９時間

(1) 新聞記者のＩさんの話に「心を動かした」Ａ児

単元の導入で「ニュースなどの情報をどこから得ているか。」と聞くと、子どもたちは、テレビ、インターネット、新聞を挙げた。「テレビは、生放送でその場の様子を教えてくれるからいい。」や「新聞は文字が細かくて読まない。」など、それぞれの媒体の長所・短所を述べ始めた。全体でそれぞれの長所と短所を整理すると子どもたちの考える新聞の長所が他に比べて明らかに少ないことから、自分たちの暮らしにとっての新聞の価値はあまりないのではないかと考え始めた。そこで、「新聞の価値は何だろう。」と単元の学習問題を設定した。子どもたちは、教科書、資料集、インターネットを使い、新聞の長所や製作工程を調べたが、価値がなかなか見いだせなかったため、新聞記者に話を聞きたいという声が上がった。そこで、記者のＩさんから話を聞く場を設定した。Ｉさんからは、「間違えたら誰かを傷付けてしまうかもしれない。謝って済むことではない。だからこそ記事を書くのはいつも怖い。この感覚がなくなったらこの仕事をやめた方がいいと思っている。」と、報道への思いを聞いた。するとＡ児は図５のように感想を書いた。

心に残ったことは、新聞を出すのは怖いということです。確かに、間違えた情報を出していないか私も心配してしまいます。それだけ記者さんたちは頑張っているということが分かりました。

図５　Ａ児の感想

Ａ児は、「心を動かし」、自分に引き付けて考えながら、新聞は人が思いを乗せて事実を書いていることを感じ取っていた。Ｉさんの話を聞き、改めて新聞の価値を考え始めた姿である。

(2) 一般紙の発行部数の変化に問題意識をもち、情報との付き合い方を考え始めたＡ児

Ａ児は、調べたことＩさんの話から、自分たちの暮らしにとっての新聞の価値は、「正確な情報が分かり、災害などに備えることができるなど、生活に安心感を与えてくれること。」とまとめた。他の子どもたちも「正確な情報」をキーワードに、それぞれが新聞の価値を見いだしていた。そこで、「一般紙の発行部数の推移と予想」の資料（図６）を提示した。すると、2037 年には 100 万部程度になっていることに着目し、子どもが「困る。」と発言したため、何が困るか問うと、「イン

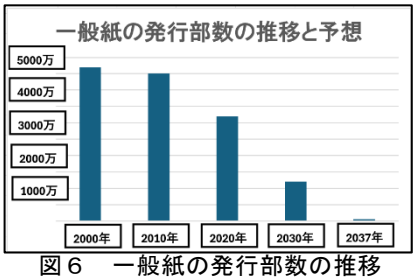

図６　一般紙の発行部数の推移

ターネットは嘘の情報もあるけれど、新聞の情報は事実だからなくなると困る。」と答えた。それに対してＡ児は、「何が本当か分からなくなる。」と、新聞がなくなってしまう社会への問題意識をもった。子どもたちが見いだした新聞の価値と未来予想にずれが生じたと捉え、学習問題「新聞が少なくなっていく未来、私たちは情報とどのように付き合っていけばいいのだろう。」を設定した。すると、Ａ児は前の席の子どもに、「ＳＮＳは嘘かもしれないよね。」と話し掛けた。

正確な情報が得られる新聞は、いつまでも存在すると考えていたが、資料の提示によりなくなってしまうという危機感が生まれ、問題意識をもち、考え始めた姿である。

(3) 仲間と協働しながら情報との付き合い方を選択・判断したＡ児

学習問題に対し、追求を始めた子どもたち。Ａ児は近くの仲間とＳＮＳの情報の正確性について話し合った。Ａ児がＳＮＳには真実ではない情報があることを話すと、他の子どもは、「でも本当かもしれないよね。」と答えた。Ａ児は、迷い、後ろの席の子どもの意見を聞いた。すると、その子どもは、「情報が他のところにも載っているか確認する。」と話した。Ａ児はそれを聞き、「なるほど。」と話し、ノートに「同じ情報があるかないか比べる。」と書いた。その後、全体交流の場でも、信頼できる出典かを見極めることや、情報の比較の重要さが挙げられた。Ａ児は振り返りに、「情報は簡単に信じてはだめだと分かりました。これから大切にしたいことは、情報を見極めるということです。」と書いた。自分の考えを確かにしたＡ児の姿である。

Ａ児は、仲間と協働しながら粘り強く追求したことで、社会への関わり方を選択・判断することができた。

Ⅴ　成果と課題

Ａ児を中心とした学級集団の姿から次のことが明らかになった。

1　信念をもってその職業に取り組んでいることを子どもに伝えてくれる人物から話を聞く場を設定したことは、子どもが社会的事象に対してより興味をもって考え始める姿を生み出すことに有効に働いた。
2　子どもの認識とずれのある資料を提示することは、子どもの中に問いを生み、自ら追求を始める姿を生み出すことに有効に働いた。
3　段階的な話合い活動を設定したことは、自分の考えと仲間の考えを比較し、社会的事象の意味を多角的に考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりする力を養うことに有効に働いた。

以上のことから研究仮説の有効性が明らかになったと考える。

それぞれの実践後に、子どもにアンケート実施した（表１）。この結果から、子どもたちは「エージェンシー」の発揮を自覚して学習を進めていたことが分かる。また、「１」に関しては、４段階評価のうち、最も評価の高い項目を選択していた子どもが実践①では 32％であったのが、実践②では 42.3％に上がった。このことから、「エージェンシー」の発揮は繰り返すことで、高まっていくことが分かってきた。

表１　アンケートにおける肯定的評価

	質問項目	実践①（%）	実践②（%）
1	目的意識をもって取り組めたか	88	92.3
2	仲間と協力することで問題を解決することができたか	100	92.3
3	次の時間に調べたいことがはっきりしていたか	76	84.6

この２実践に留まらず、本研究の重点を意識した実践を継続していくことが、本当の意味での資質・能力の育成につながっていく。そのため、今後も実践研究を継続して進めていきたい。

〈 引用・参考文献 〉

白井俊『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来－エージェンシー、資質・能力とカリキュラム―』ミネルヴァ書房 2020.12.20 P.79

藤井千春『主体的・対話的で深い学び　問題解決学習入門』学芸みらい社 2018.7.1 P.40